

自動飼育装置で桑の葉をはむ蚕を見守る牛山さん<sup>㊟</sup>と山田店主



# 3万3000頭の蚕 育成順調

## 「諏訪の絹」プロジェクト

諏訪産の蚕糸で純国産着物を作る「諏訪の絹」プロジェクトに向け、諏訪地方唯一の養蚕農家、牛山金一さん<sup>㊟</sup>が茅野市金沢<sup>㊟</sup>が飼育する3万3000頭の蚕が順調に育っている。盛んな食欲で桑の葉を食べていて、11〜12日も糸を吐き始めるといふ。牛山さんは「いい繭ができそうだ」と目を細める。

八ヶ岳山麓の茅野市では1917(大正6)年に養蚕農家が約4000戸に達した。下流域の諏訪湖周辺には製糸工場の煙突が林立し、糸の都

「シルク岡谷」と呼ばれた岡谷市では24(大正13)年、輸出糸の60%以上を産出。全盛期の30(昭和5)年、岡谷で働く女子工員は3万4500人に上った。

現在、諏訪地方の養蚕農家は牛山さんだけとなり、製糸工場は岡谷市と下諏訪町の2社を残すのみとなっている。プロジェクトは今年で12年目。牛山さんの繭を下諏訪町の「松澤製糸所」が生糸にし、諏訪市の呉服店「染と織やまだ」が着物に仕上げる取り組み。今年も人間国宝の中村勇

二郎さん(故人)が彫刻した伊勢型紙を使い、京都で染めて反物にする。来年2月ごろ発表する予定という。

「お蚕さんの命を受け止めなければ」と語り、着物作りへの決意を新たにしていた。問い合わせは同店(電話0266・58・0694)へ。(唐沢宏)

牛山さんは、8月23日から「錦秋鐘和」という品種の飼育を始め、現在は5歳で体長5センチほどという。餌の桑の葉を1日2、3回は与えていて、体長7〜8センチになる数日後には、蚕が繭になる部屋の「上簇室」に移すという。22日にも晩秋産繭として出荷される。

7日、牛山さんは「今が一番食べる時期。桑の状態が良く葉も大きい。いい繭ができそうだ」と手応えを語った。やまだの山田敦子店主(59)は